

<補遺>

「宮坂哲文の父と禅」補遺

根津 朋実*

A Supplementary to “Tetsufumi, MIYASAKA’s Father and Zen”

NETSU Tomomi*

1. はじめに

本稿は、研究ノート「宮坂哲文の父と禅：宮坂喆宗小論」（根津2013）の補遺である。同ノートの公表後、関連する記事を新たに10件以上発見したため、ここに記して補うものである。あわせて、同ノートの誤記を訂正しておく。

2. 補遺

次ページの表に、年代の古い順から記載する。表記は根津（2013、2014）にならい、適宜新字体に改めた。

3. 解題

表の各資料について、以下、根津（2013、2014）の記載事項との関連を中心に、説明を加える。

補1

『織田仏教大辞典』（1917年刊）の補修に喆宗が携わる前の記事である。喆宗は東京帝国大学哲学科を卒業（1913）し、この記事の頃

は曹洞宗の宗門内地研究生だった。公刊物に「宮坂喆宗」の名が現れた時期としては、根津（2013：117）の一覧よりも早い。

補2

幼い哲文（1918年生）の治療もあり、家族で長野から上京した頃の記事である。補1と合わせ、仏教学者木村泰賢と喆宗との密接な結びつきを看取できる。

補3から補8

雑誌『禅の生活』を約80冊入手する機会に恵まれ、筑波大学中央図書館に寄贈した。同誌は他に駒澤大学図書館が多くを所蔵するが、大正から昭和にかけて欠号がある。今回入手した史料は、この欠号分を相当に補うものである。本稿執筆の時点（2014年夏）で、国内の大学にはほぼ所蔵されていない、貴重な史料と目される。これらを確認し、補3から補8の記事を発見した。

補3

『禅の生活』誌への喆宗の初登場は1928年だった（根津2013：117）が、この記事（1924年）はそれより早い。現時点では、この記事

* 非常勤講師、Tsukuba Gakuin University

表 宮坂詰宗に関する資料：根津（2013）の補遺

No.	刊行年月	執筆者、標題、記事等	掲載誌等	備考
補1	1914（大正3）.10	「緒言」に「宮坂詰宗」の名有り。「本書の成立に関し殊に感謝すべきは文学士宮坂詰宗君の助力なり。本書の整理、校正より目次、索引の調製に至るまで君の援助に由らざるものなし」	高楠順次郎、木村泰賢『印度哲学宗教史』丙午出版社、5-6	国立国会図書館デジタルコレクション (http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/943506) による（2014年10月8日確認）
補2	1922（大正11）.11	「序文」の「公刊に際して追記」に、宮坂詰宗の名有り。「学友文学士長井真琴君、同宮坂詰宗君より特に種々の助力を得た…」	木村泰賢『阿毘達磨論成立の経過に関する研究：特に主なる四五種の論書に就いて』丙午出版社、11	国立国会図書館デジタルコレクション (http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/971047) による（2014年10月8日確認）
補3	1924（大正13）.7	宮坂詰宗「母を失ひて」	『禅の生活』3（7）、15-16	目次タイトル「母を喪いて」、目次肩書「前教学部主事」
補4	1926（大正15）.4	宮坂詰宗「米国人の社会事業に対する理解 一 社会事業より見たる世相」	『禅の生活』5（4）、80-82	洋装の写真有り
補5	1926（大正15）.5	宮坂詰宗「米国人の社会事業に対する理解（二）社会と社会事業 ◇社会事業家と実業家の提携」	『禅の生活』5（5）、74-77	
補6	1926（大正15）.6	宮坂詰宗「米国人の社会事業に対する理解（三）社会事業資金募集運動」	『禅の生活』5（6）、62-66	目次タイトル「米国社会事業資金募集運動」
補7	1926（大正15）.7	宮坂詰宗「米国人の社会事業に対する理解（四）社会事業基金募集運動（続）」	『禅の生活』5（7）、48-53	目次タイトル「米国社会事業家の基金募集運動」、英文マーク等の図版4点、及び関連写真1点有り
補8	1926（大正15）.8	宮坂詰宗「米国人の社会事業に対する理解（完）社会事業の帰趨」	『禅の生活』5（8）、80-84	目次タイトル「米国社会事業運動」
補9	1928（昭和3）.4	宮坂詰宗「修養ニ関スル諸問題」、「東筑摩郡願水寺住職 文学士 宮坂詰宗」、2回、12時間、聴講者96名	文部省普通学務局『昭和二年度 本省主催成人教育講座実施概要（第二輯）』（昭和3年4月）、242	国立国会図書館デジタルコレクション (http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1083494) による（2014年10月8日確認）
補10	1934（昭和9）	「七月十五日 告示第二十七号 宮坂詰宗恩衣着用特許ノ件」	『昭和九年宗報』890	川口（2006：172）による
補11	1954（昭和29）.4	「宗教的教養と宗門のあり方」	『跳龍』5（4）、38-41	「曹洞宗関係文献目録 オンライン検索」による
補12	1954（昭和29）.8	「安達達淳老師の回顧 一 松本藩廢仏弾圧に対する反抗運動 -」	『跳龍』5（8）、20-28	「曹洞宗関係文献目録 オンライン検索」による

が喆宗の『禅の生活』誌への初出と目される。付記「このたよりを頂いて、病人の側にみた私は、暗涙にむせびました。そして、おたよりをその儘こゝに掲げさせて頂きました。(山田)」(傍点及び原文ルビは割愛)から、もとは喆宗発の私信の類이었다と考えられる。

1924年4月、喆宗は宗務院を辞任し、郷里長野へ戻った(根津2013:115)。その前後から喆宗の母が病に伏し、喆宗自身も「病床に悩む身」となった(補3:16)。同年5月5日の母の死が、この一文の動機としてうかがえる(同:15)。母との死別に加え、喆宗自らの身体の弱さにも触れられている(同)。

補4から補8

『禅の生活』誌に、5回にわたって連載された記事である。これらの記事は、1925年5月のハワイ・北米訪問、同年11月のロスアンゼルス滞在から1年と経っておらず、それぞれの見聞が内容に反映されたと考えられる。内容からみて、のちの記事「同情週間に就て」(1930年)、及び論文「米国社会事業資金募集運動と我が社会事業の実状に就いて」(1931年)のもとになったと目される。

補9

戦前において喆宗と成人教育、社会教育との関わりを示す記事である。この点、詳細は未解明であり、さらなる研究が俟たれる。念のため、前年(1927年3月刊)と後年(1929年3月刊)の同種資料も確認したが、喆宗の名は無かった。単年度のみの担当となった理由は不明である。

補10

曹洞宗での喆宗の立場を示す資料である。喆宗は1931年には曹洞宗宗会議員(公選52名の1)だった(根津2013:116)。

補11及び補12

戦後に公刊された資料である。根津(2013:118)は1950年代の資料を1件しか確認しておらず、これら2件の発見は重要である。補11には教育委員長として新制中学校への言及があり、根津(2013:116)の1952年から1954年の記事を裏付ける。また補12(23)には、幼少時の回想が次の通りみられる。

筆者は斯かる廃仏の地南安曇郡有明村青原寺に育ち当時の小学四年高等四年修了の明治三十六年迄の往時を追想して、転た感慨に堪えぬものがある。寺院には聊かの権威も無く、僧侶は軽視侮蔑の的であつた。寺院の子弟の故を以て、仲間からは常に残虐な扱いを受け、一緒に通学することさえ出来ぬ浮き目に晒されたものである。松本中学入学に及んで、初めて友人と交はる喜びを得た程である。

根津(2013:114)には、幼少時に喆宗が坂北村碩水寺の徒弟となった事実のみが記され、その詳細な年代も不明だった。上述の引用から、新たに喆宗の小学校時代の様子がわかり、碩水寺の他に青原寺との関わりも判明した。喆宗の小学校時代の苦難、及び旧制松本中学の重要性もうかがえる、興味深い回想である。

補12について付言する。「曹洞宗関係文献目録 オンライン検索」(<http://www.sotozen-net.or.jp/tmp/kensaku.htm>)によれば、計五点が「宮坂・宗」による記事として記載されている(2014年10月8日確認)。この「●」は、外字扱いを意味する。うち、根津(2013)で未確認だった記事は、次の二点である。

「宗教的教養と宗門のあり方」『跳龍』(1954.4)

「安達達淳老師の回顧(2回)」『跳龍』

(1954.7-8)

これらの複写物を取り寄せて確認したところ、次の通り、宮坂結宗による記事だった。
補1が宮坂(1954a)に、補2が宮坂(1954b)に、それぞれ相当する。

宮坂結宗(1954a)「宗教的教養と宗門のあり方」『跳龍』5(4)、38-41

宮坂結宗(1954b)「安達達淳老師の回顧 - 松本藩廃仏弾圧に対する反抗運動 -」『跳龍』5(8)、20-28

このうち宮坂(1954b)は、前述「曹洞宗関係文献目録 オンライン検索」の検索結果とは異なった。すなわち、2回連載ではなく、1回のみの記事だった。記事の複写を依頼した駒澤大学からの回答によれば、大要、『跳龍』5(7)の目次に記事名はあったが本文がなく、同誌5(9)に目次と内容の不一致に関するお詫びが掲載されていた、とのことだった(2013年3月8日、筑波大学中央図書館を通じ電子メールにて回答)。宮坂(1954b)は、本来同誌5(7)に掲載予定だったが何らかの原因で本文から漏れ、5(8)に一括して掲載され、5(9)にお詫びが記された、と思われる。

4. 誤記の訂正

以下、気づいた範囲で、誤記を訂正しておく。

・根津(2013:116)、表1「宮坂結宗(1887-1973)の略歴」のうち、「1943(昭和18)」の「記

事」の「著書『断食と節量食』」は誤り、「著書『断食より節量食へ』」が正しい。

・根津(2013:117)、表2「宮坂結宗に関連する文献等一覧」のうち、「No.6」の「掲載誌等」中、「8」, 41-43」は誤り、「(8), 41-43」が正しい。

・根津(2013:117)、表2「宮坂結宗に関連する文献等一覧」のうち、「No.10」の「執筆者、標題」中、「実情」は誤り、「実状」が正しい。

5. おわりに

今回は比較的まとまった公開資料を確認・入手できたため、このように補遺を作成した。引き続き、新たな資料の収集に努めたい。

謝 辞

JSPS 科学研究費(基盤研究(C)、課題番号25381232、研究課題「宮坂哲文にみる戦後教科外活動の源流」、研究代表者:根津朋実)の助成を受けた。本稿はその研究成果の一部である。

文献(表中の文献は割愛した)

- 川口高風(2006)「『宗報』の法規令達の総目録(一)」『禅研究所紀要』(愛知学院大学)34、135-196
根津朋実(2013)「宮坂哲文の父と禅:宮坂結宗小論」『筑波学院大学紀要』8、113-122
根津朋実(2014)「宮坂哲文『禅における人間形成』(1947)前史」『教育学研究』81(1)、26-36